

受身の文法的機能を果たす機能動詞「受ける」の一考察

朱薇娜

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

shubina0825@hotmail.com

1. はじめに

下記の例文(1)(2)において「影響される」は「影響を受ける」と言い換えられる。このように、日本語では文法的機能を果たす受身のマーカー「レル・ラレル」の代わりに、受身の意味を表わす動詞「受ける」を用いて言い表すことがある。

- (1) 子供は他人に影響されやすい。
- (2) 子供は他人の影響を受けやすい。¹

村木(1991:203)は、機能動詞を「実質的な意味を名詞にあずけて、みずからはもっぱら文法的機能をはたす動詞」と定義しており、「する」を典型的な機能動詞と見なすほか、「誘いを受ける」の「受ける」はヴォイス的な意味を表わす機能動詞としている。本稿では、村木(1991)の考えを踏襲して受身の文法機能を果たす「受ける」を機能動詞と見なし、「受ける」と機能動詞結合を形成するヲ格名詞に焦点を当てて論じる。

「受ける」は多義語で、小泉(1989)は9つの意味・用法、森田(1989)は構文的な特徴による4種類の構文に、張(2011)は10の意味・用法に分類している。その意味・用法のうち、「ボールを両手で受ける」、「学校から奨学金を受ける」のように、一般名詞と結びつく場合がある。この場合、「受ける」はそれぞれ「受け取る」、「もらう」の意味で、機能動詞と見なさないため、それらのヲ格名詞を本稿の考察対象から外す。

岸本(2010)は「受ける」の多義性を出来事に対する意図性の有無によって「行為」と「移動」の二つに大別できると指摘している。「移動」の場合は、受身の意味を表わすことができる。また、「移動」なのか「行為」なのかを判断するための統語的な手段を提供している。「移動」の場合は「①「道具」を具現化することができず、可能形や命令形ができない。②「わざと」のような副詞及び目的語節が生起できない。③起点表現の表出が可能である。④受身化できない。」という四つの特徴がある。

本稿では、機能動詞「受ける」が受身の意味を表わすには、ヲ格名詞の統語的意味的特徴にも関わっていると考え、コーパスで「受ける」はどんなヲ格名詞と結びつくかを調査することを通して、「レル・ラレル」形の文法的な受身と対照しながら、その特徴を明らかにする。

2. コーパス調査

ここで、国立国語研究所とLago言語研究所が開発した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

のオンライン検索システム NLB (<http://ninjal-lwp-bccwj.ninjal.ac.jp/>) を利用して、「受ける」のヲ格名詞を検索した。紙幅の都合で、頻度 65 以上のヲ格名詞 52 語を表 1 に示す。(各活用形を含む「受ける」の出現頻度は 20,983、ヲ格名詞の異なり語数が 1939)

表 1 「受ける」のヲ格名詞 (上位 52 語) ²

	名詞	頻度		名詞	頻度		名詞	頻度		名詞	頻度
1	影響	865	14	訓練	171	//	許可	105	40	支援	90
2	教育	480	15	試験	170	28	判決	104	41	連絡	85
3	被害	374	16	攻撃	159	//	融資	104	42	交付	82
4	ショック	353	17	説明	150	30	保護	102	43	命	81
5	治療	260	18	打撃	142	31	依頼	100	44	指定	80
6	報告	213	19	指導	141	//	処分	100	//	授業	80
7	手術	209	20	扱い	139	33	承認	97	46	批判	75
8	検査	208	21	相談	125	34	診察	95	//	要請	75
9	それ	186	22	洗礼	116	35	サービス	93	48	指示	73
10	これ	183	23	援助	109	36	恩恵	92	49	ダメージ	72
11	適用	179	24	刺激	108	37	感銘	91	//	診断	72
12	印象	175	25	評価	107	//	質問	91	51	認定	71
//	衝撃	175	26	命令	105	//	電話	91	52	制約	66

表 1 を見ると、「影響」が一位を占め、次いで「教育」、「被害」、「ショック」の順になることが分かる。52 語のうち、「被害」、「それ」、「これ」、「試験」³、「印象」、「衝撃」、「打撃」、「扱い」、「洗礼」、「判決」、「恩恵」、「命」、「ダメージ」の 13 語が動名詞⁴ではないが、残りの 39 語がすべて動名詞である。非動名詞の 13 語のうち、「扱い」は動詞連用形転成名詞で、「衝撃」、「打撃」と「ショック」は「する」を伴って動詞化できないが、動作性を強く感じられるため、本稿では動作性名詞と呼ぶ。

3. ヲ格名詞の統語的・意味的・形態的特徴

例文 (3ab) は動詞の「レル・ラレル」形の文法的な受身形式と「受ける」を用いた語彙的な受身形式の交替現象を示している。ただ、「レル・ラレル」形と比べ、「動詞連用形転成名詞+受ける」形式はごくまれで、むしろ周辺的な用法であるため、稿を改めて考察する。

例文 (4ab) に示されているように、「衝撃」等の名詞は動詞化できないため、文法的な受身形式の「レル・ラレル」形が欠如している。受身の意味を表わす唯一の表現形式であるということから、動作性名詞と結びつく「受ける」は機能動詞の性質が最も強いと言えよう。

- (3) a. 田中さんは友達に誘われた。
b. 田中さんは友達から誘いを受けた。
(4) a. 田中さんは親友の死に衝撃を受けた。
b. *田中さんは親友の死に衝撃された。

次はヲ格名詞における最も多い動名詞の統語的・意味的・形態的特徴をめぐって考察を進める。

3.1 三項動名詞

動名詞のうち、「要請」、「融資」、「報告」、「説明」等のような動作主格、非動作主格、対象格の三項を取る動名詞がある。「報告」を例にして、例文(5)は能動文で、例文(6a)は統語的な変形による文法的受身文で、(6b)は語彙的手段を使った受身文である。(6b)と比べ、(6a)はいささか不自然さがある。

- (5) 鈴木さんは上司に営業実績を報告した。——能動文
(6) a. ?上司は鈴木さんから営業実績を報告された。——文法的受身
b. 上司は鈴木さんから営業実績の報告を受けた。——語彙的受身

文法的受身文の典型例は「鈴木さんが田中さんに殴られた」で示されるような、主語が行為により影響を受ける文である。その成立には動詞の他動性と主語の受影性がかかわっている。それはヲ格名詞を「営業実績」から「クレーム」等のようなマイナスのニュアンスを持つ語に置き換えると、自然さが上がることにも裏付けられている。

岸本(2010:203)は二項動詞の例を用いて、能動文と「レル・ラレル」形の文法的受身文との関係は、「同じ出来事を異なる視点から述べたもので、同じ理論的な意味をもつ」と指摘しているが、二項動詞の場合は妥当だと言えるが、三項動詞の場合は、むしろ「受ける」を用いた語彙的受身形式のほうが能動文とより近い対応関係を示していると考えられる。

3.2 動名詞の語構成

動名詞の語構成上の特徴を見る。小林(2004:87-89)は、二字漢語動名詞を次の四種類に分けて、「読書、投票」のようなVN-Nタイプ二字漢語動名詞、「使用、採用」のようなVN-VNタイプ二字漢語動名詞、「銃殺、密売」のようなADJ-VNタイプ二字漢語動名詞、構成要素が抽出できない二字漢語動名詞となっている。

「受ける」と結びつく動名詞を見ると、「支援」、「教育」、「指導」のような並列関係にあるVN-VNタイプの漢語名詞が最も多い。また「砲撃」のような様態修飾成分+動詞ADJ-VNタイプもあるが、「撃沈」のような動作動詞+結果動詞タイプがないことが分かる。ここで文法的な受身形式と対照しながら、その理由を探る。

- (7) a. 韓国は北朝鮮に砲撃された。

b. 韓国は北朝鮮の砲撃を受けた。

(8) a. 韓国の軍艦は北朝鮮によって撃沈された。

b. *韓国の軍艦は北朝鮮の撃沈を受けた。

「撃沈」の「沈」に対応する和語は「沈める」で、有対他動詞に属する。有対他動詞は動作の結果を含むため、動作主からの直接的行為を要求する「受ける」とは意味的に相容れない。「撃沈」の他に、「撃破」、「射殺」、「打破」、「打倒」等の語が挙げられる。VN-VN タイプの二字漢語動名詞の後項 VN に対応する V は有対他動詞に属する場合、「受ける」のヲ格名詞としては適格ではないと考えられる。

4. まとめ

以上はコーパス調査を通して受身の役割を担う機能動詞「受ける」を考察した。まず、「受ける」は、「影響」、「処分」等の動名詞、「衝撃」、「打撃」等の動作性名詞と「扱ひ」、「誘ひ」等の動詞転成名詞と結びつく場合、受身の文法機能を果たす機能動詞として見なすことができる。動名詞の格支配の観点から、三項動名詞の場合、「レル・ラレル」形の文法的受身文より「受ける」を用いた語彙的な受身文のほうがむしろ能動文とより近い対応関係を示している。また、動名詞の語構成をみると、「レル・ラレル」形は動作主の行為で引き起こされた結果を含むこともあるが、「受ける」を用いた語彙的な受身形式は動作主からの直接的行為でなければならない。

注

- 1) 「レル・ラレル」形の文法的な受身形式は動作主が通常ニ、カラによって標示されているが、「受ける」を用いた語彙的な受身形式はニ、カラの他に、元の動詞の名詞化を伴い、連体修飾節として現れる場合もあり、つまり例 (1) のようにノ、カラノにより動作主を標示することもある。動詞によって、ニ、カラ、カラノ、ノの許容度が違う場合もある。これらの興味深い問題は、稿を改めて考察する。
- 2) 「受ける」のヲ格名詞には【一般】というヲ格名詞項目がある。その中身を見ると、「アロマ・セラピー」や「衝激」、「郷試」、「インスピレーション」等の固有名詞ではない語がある。NLB では形態素解析には IPA 辞書を使用しており、固有名詞については細分類をまとめてコロケーションの項目として立てているが、辞書に含まれない語（未知語）が固有名詞の一般に分類される場合があるが、それらの語が上位語ではないため、表 1 には影響が及ばない。
- 3) 「試験」は多義語で、「新建材の耐久性を試験する」という文で示すように、動名詞となる場合がある。「試験を受ける」の「試験」は、「入学・入社・登用などの採否を決めるためのテスト」で、出来事名詞と見なしうる。同じような語には「判決」、「洗礼」等がある。
- 4) 影山(1993)の定義によると、動名詞(VN)とは「する」を伴って動詞化できる表現のことである。